『日本外交の劣化　再生への道』（山上信吾著　文芸春秋）を読んで

徳田　八郎衛　陸自61

1　劣化の現状と原因

ご厚誼をいただいてきた外交官の何名かが退官後、手厳しい外交批判書を上梓された。勇気ある出版に感心したが、実名で元上司や同僚を批判したものは少ない。ところが駐豪大使を最後に40年間勤めた外務省と2023年末に決別した著者は、実名で行動や発言を紹介する。学界の一隅で論文らしきものを書いてきた筆者には実名で違和感は無いのだが…。

「何人もの先輩が『組織に恥をかかせたくない』『後輩に迷惑をかけたくない』と黙って去っていったが、次官以下、急速に進んでいる士気の低下、組織としての機能不全、それらがもたらす外交の劣化を見過ごせない」ので外交官としての遺言として本書を書き残した。以前の先輩、同僚、後輩との人間関係に遠慮して丸く収めるのは諦め、歯に衣を着せず敬称を略して語るのは、劣化の深刻さは待ったなしだから。

第一部「日本外交の劣化の現実」では、①日露交渉における外務省の不作為と沈黙、②腰の引けた対中外交、③米国にNOと言えない日本、④慰安婦像乱立の大罪、⑤（カブール撤退時の）身内を捨てた退却戦略などの6件が、第二部「なぜここまで劣化したのか？」では、①ロビイング力の決定的不足、②惨憺たる対外発信力から、⑩いびつな人事までの、10要因が挙げられているが、本誌読者が共感するのは、③歴史問題でのことなかれ主義と、④日の丸を背負う気概の弱さではなかろうか。

在外公館への赴任前に担当部局から受ける教育で、「歴史問題について日本の立場を訴えることがプロパガンダと受け取られぬよう注意」と後輩の講師から再三言及された著者は、「条件反射的に村山談話へ逃げ込み、痛切な反省とお詫びで嵐が過ぎるのを待つ風潮では散華した英霊は浮かばれない」と憤る。

度々外国で暮らし外国相手に交渉する外交官は、一般人以上に国を意識するはずなのに愛国心への衒いがあり、国際協調や平和の追求を語る方が知的レベルの高さを示すという信仰や思い込みが強い。そして平和主義のコインの裏面として軍人嫌いがあり、外交と軍事は国家の生存のための車の両輪であることを認めない外務官僚も多いそうだ。

2　再生への道

第三部「再生への道」は、①精強な組織づくり、②情報収集力強化から、⑩公正な人事の確立まで、10提言が並ぶ。国際情報統括官の職務に生き甲斐を感じた著者だけに、情報収集力強化を重視し、今も外務省は「作戦重視・情報軽視」だと嘆く一方、外交一元化の観点から警察・公安関係者が推進する対外情報庁の設置に反対する姿勢にも苦言を呈する。ただ業務の複雑な性格、難易度に鑑みれば警察官、外交官、公安調査官、自衛官のいずれもぴったりしないから、新たな要員を育て対外情報庁に充てねばならないと説く。

公正な人事、あるべき政官関係も当局や政治家に遠慮せずに求めるが、著者が第二部に続いて重視するのは歴史戦の強化だ。日本軍が30万人に及ぶ中国人を虐殺したと中国が主張する「南京虐殺」についても、「虐殺」は認めないことで日本の保守派を立てながら、「非戦闘員の殺害又は略奪」を認めて、左派や外国勢力にも配慮する国会答弁的なセリフで長年応答してきた。

奥歯にものが挟まったようなこのセリフでは、国際場裏では何を言っているのか不明瞭で、「大虐殺」を喧伝して回る中国側のキャンペーンに対抗できるはずがない。専門家が指摘するように南京の悲劇は、虐殺と称する平時の逸脱行為ではなく、混乱を極めた市街地での戦闘行為に基づく古今東西共通の問題である。総合外交政策局審議官の時に奮起した著者は、歴史問題に関する積極的な発信セリフを作り、現場の外交官が度々接する批判に対する応答要領を在外公館と共有したという。

ロシアによるウクライナ侵略を奇貨として歴史問題のパラダイムが大きく変わった今、今の喫緊の課題にどう対処すべきかのナラティブこそが重要であり、国際潮流に通暁した外交官こそ先頭に立ってこうしたナラティブを打ち出そうと呼びかける。憂国の書といえよう。